

瘠我慢の説

瘠我慢の説

福沢諭吉

青空文庫

立^{りつこく}国^{わたくし}は私^おなり、公^おに非^おざるなり。地球^{ちきゅう}面の人類^{じんるい}、その数億^{しゆいふ}の
 みならず、山^{さん}海^{かい}天^{てん}然^{ねん}の境^{きよう}界^{かい}に隔^{へだ}てられて、各^{かく}処^{しよ}に群^{ぐん}を
 成^{せい}し各^{かく}処^{しよ}に相^{あい}分^{わか}るるは止^{とど}むを得^えずといえども、各^{かく}処^{しよ}におのおの
 衣^い食^{じき}の富^ふ源^{げん}あれば、これによりて生活^{せいかつ}を遂^とぐべし。また或^{ある}は各地^{かくち}
 の固^こ有^うに有^{ゆう}余^よ不^ふ足^{そく}あらんには互^{たが}にこれ^{これ}を交^{こう}易^{えき}するも可^かなり。す
 なわち天^{てん}与^よの恩^{おん}恵^{けい}にして、耕^{たが}して食^やい、製^{せい}造^{ぞう}して用^{もち}い、交^{こう}易^{えき}
 して便^{べん}利^りを達^{たつ}す。人^{じん}生^{せい}の所^{しよ}望^{もう}この外^{ほか}にあるべからず。なんぞ必^{かならず}
 ずしも区^く々^々たる人^{じん}為^いの国^{こく}を分^{わか}て人^{じん}為^いの境^{きよう}界^{かい}を定^{さだ}むることを須^{もち}いん
 や。い^いわんやその国^{こく}を分^{わか}て隣^{りん}国^{こく}と境^{きよう}界^{かい}を争^{まが}うにおいてをや。い^いわ
 んや隣^{りん}の不幸^{ふこう}を顧^かみずして自^みから利^りせんとするにおいてをや。い

わんやその国に一個の首領を立て、これを君として仰ぎこれを主として事え、その君主のために衆人の生命財産を空うるがごときにおいてをや。いわんや一国中になお幾多の小区域を分ち、毎区の人民おのおの一個の長者を戴てこれに服従するのみか、つねに隣区と競争して利害を殊にするにおいてをや。

すべてこれ人間の私情に生じたることにして天然の公道にあらずといえども、開闢以来今日に至るまで世界中の事相を觀るに、各種の人民相分れて一群を成し、その一群中に言語文字を共にし、歴史口碑を共にし、婚姻相通じ、交際相親しみ、飲食衣服の物、すべてその趣を同うして、自から苦樂を共にするとき、復た離散すること能わず。すなわち国を立てまた政府を設る

所以ゆえんにして、すでに一国の名を成すときは人民はますますこれに
 固着こちやくして自他の分ぶんを明あきらかにし、他国他政府に對しては恰あたも痛痒つうよう
 相感あかんぜざるがごとくなるのみならず、陰陽表裏いんようひょうり共に自家の利
 益えきを主張えいしてほとんど至らざるところなく、そのこれを主張
 することいよいよ盛なる者に附するに忠君愛國ちゆうくんあいこく等の名を以
 てして、国民最上の美德と稱すること不思議なれ。故に忠君愛國
 の文字は哲学流に解すれば純平じゆんへいたる人類の私情しじやうなれども、今
 日までの世界の事情においてはこれを稱して美德といわざるを得
 ず。すなわち哲学の私情は立国の公道こうどうにして、この公道公德の
 公認せらるるは啻ただに一国において然しかのみならず、その国中に幾
 多の小区域あるときは、毎区必ず特色の利害に制せられ、外に對

するの私を以て内のためにするの公道と認めざるはなし。たとえば西洋各国相對し、日本と支那朝鮮と相接して、互に利害を異にするは勿論、日本国中において封建の時代に幕府を中央に戴て三百藩を分つときは、各藩相互に自家の利害榮辱を重んじ一毫の微も他に譲らずして、その競争の極は他を損じても自から利せんとしたるがごとき事実を見てもこれを証すべし。

さて、この立国立政府の公道を行わんとするに当り、平時に在ては差したる艱難もなしといえども、時勢の変遷に従て国の盛衰なきを得ず。その衰勢に及んではとても自家の地歩を維持するに足らず、廃滅の数すでに明なりといえども、なお万一の僥倖を期して屈することを為さず、実際に力尽きて然る後

に斃たおるはこれまた人情しんじやうの然しからしむるところにして、その趣たどを諭たどえていえば、父母の大病に回復の望なしとは知りながらも、實際の臨終に至るまで医薬の手当おこたを怠おこたらざるがごとし。これも哲学流にていえば、等しく死する病人なれば、望なき回復を謀はかるがためいたずらに病びやう苦くを長くするよりも、モルヒネなど与えて臨りんじゆ終うを安樂あんらくにするこそ智なるがごとくなれども、子なと為なりて考ううれば、億万中の一を僥ぎやう倖こうしても、故ことらに父母の死うなを促うながすがごときは、情しんじやうにおいて忍しのびざるところなり。

左されば自国の衰すいたい頹たいに際し、敵てきに対して固もとより勝しょう算さんなき場合ばいにても、千辛せんしん万苦ばんく、力ちからのあらん限かぎりを尽つくし、いよいよ勝敗しょうぱいの極きよくに至りて始めて和を講ずるか、もしくは死を決するは立国の公

道にして、国民が国に報ずるの義務と称すべきものなり。すなわち俗にいう瘖我慢やせがまんなれども、強弱相対あいたいしていやしくも弱者の地位を保つものは、単ひとえにこの瘖我慢に依よらざるはなし。啻ただに戦争の勝敗のみに限らず、平生の国交際においても瘖我慢の一義は決してこれを忘るべからず。欧州にて和蘭オランダ、白耳義ベルギーのごとき小国が、仏独の間に介在かいざいして小政府を維持するよりも、大国に合がつ併いするこそ安楽あんらくなるべけれども、なおその独立を張はりて動かざるは小国の瘖我慢にして、我慢能く国の榮譽えいよを保つものというべし。

わがほうけん
我封建の時代、百万石の大藩となりに隣して一万石の大名あるも、大名はすなわち大名にして毫ごうも譲ゆずるところなかりしも、畢ひつき竟よう

瘠我慢しかの然らしむるところにして、また事柄ことがらは異なれども、天下の政權武門きに歸し、帝室ていしつは有れども無きがごとくなりしこと何百年、この時に当りて臨時りんじの処分しよぶんを謀りたらば、公武合体こうぶがつたい等種々の便利法べんりはうもありしならんといえども、帝室にして能くその地位ちゐを守り幾艱難いくかんなんのその間まにも至尊犯しそんおかすべからざるの一義いつぎを貫つらぬき、たとえば彼の有名かなる中山大納言なかやまだいなごんが東下とうかしたるとき、將軍家もくを目して吾妻あずまの代官しろくわんと放言ほうげんしたりというがごとき、当時の時勢ときせいより見れば瘠我慢やせがまんに相違さういなしといえども、その瘠我慢やせがまんこそ帝室ていしの重おもきを成したる由縁ゆえんなれ。

また古来士風の美をいえば三河武士みかわぶしの右みぎに出る者はあるべからず、その人々について品評ひんひやうすれば、文に武に智に勇におのおの長

ずるところを殊ことにすれども、戦せん国割ごく抛かつきよの時に当りて徳川の旗き下かに属し、能よく自じ他たの分ぶんを明あきらかにして二念にねんあることなく、理にも非にもただ徳川家の主公あるを知しりて他を見ず、いかなる非運に際して辛苦しんくを嘗なむるもかつて落胆らくたんすることなく、家のため主公のためとあれば必敗ひつばい必死ひつしを眼がん前ぜんに見てなお勇進ゆうしんするの一事は、三河武士全体の特徴、徳川家の家風なるがごとし。これすなわち宗そ祖うそ家康公いえやすこうが小身しょうしんより起りて四方を經けい営えいしつついに天下の大権けんを掌しょう握あくしたる所以ゆえんにして、その家の開運かいうんは瘖我慢の賜たまものなりというべし。

左されば瘖我慢の一主義もとは固より人の私情いずに出ることにして、冷れ淡たんなる数理より論ずるときはほとんど児戯じぎに等しといわるるも

弁解べんかいに辞じなきがごとくなれども、世界古今の実際において、所いわゆるわゆる謂い国家なるものを目的に定めてこれを維持保存いじほぞんせんとする者は、

この主義しよぎに由よらざるはなし。我封建の時代に諸藩の相互に競争ししきやしなして士氣しきを養やしなうたるもこの主義しよぎに由より、封建すでに廃はいして一統の大日本帝国と為なり、さらに眼界を広くして文明世界に独立の体面たいめんを張はらんとするもこの主義しよぎに由よらざるべからず。

故に人間社会の事物今日の風にてあらん限りは、外面の体裁ていさいに文野の変遷へんせんこそあるべけれ、百千年の後に至るまでも一いっ片ぺんの瘠我慢は立国の大本たいほんとしてこれを重んじ、いよいよますますこれを培養ばいようしてその原素の発達を助くること緊要きんようなるべし。すなわち国家風ふう教きょうの貴たつとき所以ゆえんにして、たとえば南宋の時に廟び

議ようぎ、主戦しゆせんと講和こうわと二派に分れ、主戦論者は大抵皆擯たいていみなりぞけられ
 て或あるいは身を殺したる者もありしに、天下後世の評論は講和者の不
 義にくを悪んで主戦者の孤忠こちゆうを憐あわれまざる者なし。事の実際をいえば
 弱じやくそう 宋の大事すでに去り、百戦必敗ひつぱいは固もとより疑うべきにあら
 ず、むしろ恥はじを忍しのんで一日も趙ちよう氏の祀まつりを存したるこそ利益なるに
 似たれども、後世の国を治おさむる者が経綸けいりんを重んじて士氣しきを養わん
 とするには、講和論者の姑息こそくを排はいして主戦論者の瘠我慢を取らざ
 るべからず。これすなわち両者が今に至るまで臭しゆうほう 芳の名ことを殊
 にする所以ゆえんなるべし。

然しかるに爰こゝに遺憾いかんなるは、我日本国において今を去ること二十余
 年、王政維新おうせいいしんの事起ことりて、その際不幸にもこの大切なる瘠我慢やせがま

慢の一大義を害したることあり。すなわち徳川家の末路に、家臣の一部分が早く大事の去るを悟り、敵に向てかつて抵抗を試みず、ひたすら和を講じて自から家を解きたるは、日本の経済において一時の利益を成したりといえども、数百千年養い得たる我日本武士の氣風を傷うたるの不利は決して少々ならず。得を以て損を償うに足らざるものというべし。

そもそも維新の事は帝室の名義ありといえども、その実は二、三の強藩が徳川に敵したるものより外ならず。この時に当りて徳川家の一類に三河武士の旧風あらんには、伏見の敗余江戸に帰るもさらに佐幕の諸藩に令して再挙を謀り、再挙三拳ついに成らざれば退て江戸城を守り、たとい一日にても家の運命を長く

してな お万一を 僥倖ぎようこうし、いよいよ策竭つくるに至りて城を枕に討う死ちじにするのみ。すなわち前にいえるごとく、父母の大病に一日の長命を祈るものに異ことならず。かくありてこそ瘠我慢の主義も全きものというべけれ。

然しかるに彼の講和論者こうわろんじやたる勝安房かつあわ氏の輩はいは、幕府の武士用うべからずといひ、薩長兵さつちようへいの鋒敵ほこさきすべからずといひ、社会の安あんね寧い害すべからずといひ、主公の身の上危あやうしといひ、或は言を大にして墻かきに閱せめぐの禍は外交の策にあらずなど、百方周旋しゆうせんするのみならず、時としては身を危あやううすることあるもこれを憚はばからずして和議わぎを説とき、ついに江戸解城なと為り、徳川七十万石の新封しんぽうと為りて無事ぶじに局を結びたり。実に不可思議ふかしぎせんぼん千万なる事相じそうにして、

当時或る外人の評に、およそ生あるものはその死になんな垂んとして抵抗を試みざるはなし、しゆんじ蠢爾たるこんちゆう昆虫が百貫目のてつつい鉄槌に撃たるるときにても、なおその足を張て抵抗の状をなすの常なるに、二百七十年の大政府が二、三強藩の兵力に対してごう毫も敵対の意なく、ただ一いつこう向に和を講じ哀を乞うて止まずとは、古今世界中に未だその例を見ずとて、ひそか竊に冷笑したるも謂れなきにあらず。

けだ蓋しかつしはい勝氏輩のしよけん所見は内乱の戦争を以て無上のさいがいむえき災害無益の勞費と認め、味方にしょうさん勝算なき限りは速に和して速に事を収るにすみやかわ若かずとの数理を信じたるものより外ならず。その口に説くところを聞けば主公のあんき安危または外交の利害などいとうといえども、そ

の心術の底を叩てこれを極むるときは彼の哲学流の一種にして、人事国事に瘠我慢は無益なりとて、古来日本国の上流社会にもつとも重んずるところの一大主義を曖昧模糊の間に瞞着したる者なりと評して、これに答うる辞はなかるべし。一時の豪氣は以て懦夫の胆を驚かすに足り、一場の詭言は以て少年輩の心を籠絡するに足るといへども、具眼卓識の君子は終に欺くべからず悩うべからざるなり。

左れば当時積弱の幕府に勝算なきは我輩も勝氏とともこれを知るといへども、土風維持の一方より論ずるときは、国家存亡の危急に迫りて勝算の有無は言うべき限りにあらず。いわんや必勝を算して敗し、必敗を期して勝つの事例も少

なからざるにおいてをや。然るを勝氏は予め必敗を期し、その未だ実際に敗れざるに先んじて自から自家の大権を投棄し、ひたすら平和を買わんとて勉めたる者なれば、兵乱のために人を殺し財を散ずるの禍をば軽くしたりといえども、立国の要素たる瘡我慢の土風を傷うたるの責は免かるべからず。殺人散財は一時の禍にして、土風の維持は万世の要なり。これを典して彼を買う、その功罪相償うや否や、容易に断定すべき問題にあらざるなり。

或はいう、王政維新の成敗は内国の事にして、いわば兄弟朋友間の争いのみ、当時東西相敵したりといえどもその実は敵にして敵にあらず、兎に角に幕府が最後の死力を張らずしてそ

の政府を解きたるは時勢に応じて好き手際なりとて、妙に説を作
 すものあれども、一場の遁辞口実たるに過ぎず。内国の事
 にも朋友間の事にも、既に事端を発するときは敵はすなわ
 ち敵なり。然るに今その敵に敵するは、無益なり、無謀なり、国
 家の損亡なりとて、専ら平和無事に誘導したるその士人を率
 いて、一朝敵国外患の至るに当り、能くその士気を振うて
 極端の苦辛に堪えしむるの術あるべきや。内に瘖我慢なき
 ものは外に対してもまた然らざるを得ず。これを筆にするも不
 祥ながら、億万一にも我日本国民が外敵に逢うて、時勢を見
 計らい手際好く自から解散するがごときあらば、これを何とか言
 わん。然り而して幕府解散の始末は内国の事に相違なしといえど

も、自おのから一例を作りたるものというべし。

然しかりといえども勝氏またじんけつも亦人傑ぶつろんなり、当時幕府内部の物論を

排はいして旗下きかの士げきこうの激昂しずを鎮め、一身を犠牲ぎせいにして政府を解とき、

以て王政維新おうせいいしんの成功を易やすくして、これが為ために人の生命を救い

財産を安全ならしめたるその功徳こうとくは少なからずというべし。こ

の点に就つては我輩わがはいも氏の事業を軽けい々けい看過かんかするものにあらざれ

ども、独ひとり怪あやしむべきは、氏が維新ちようの朝さに曩なきの敵国の士人と並

立らびて得とく々とく名利みようりの地位おに居るの一事いなり（世いに所謂いわゆる大

義名分めいぶんより論ずるときは、日本人はすべて帝室ていしつの臣民にし

て、その同胞どうほう臣民しんの間に敵も味方もあるべからずといえども、

事あの実際は決して然しからず。幕府の末年に強藩の士人等が事を挙げ

て中央政府に敵し、其そのこれに敵するの際に帝室の名義を奉じ、幕政の組織を改めて王政の古いにしえに復したるその拳きよを名けて王政維新と称することなれば、帝室ていしつをば政治社外の高こう処しよに仰あぎ奉りて一いち様ちやうにその恩徳おんとくに浴よくしながら、下界げかいに居おつ相争あう者あるときは敵味方の区別なきを得ず。事實じじつに掩おうべからざるところのものなればなり。故ゆえに本文ほんもん敵国の語あるいは不穩ふおんなりとて説なを作すものもあらんなれども、当時たうじの實際じじつより立論りつろんすれば敵の字あを用いざるべからず。

東洋和漢の旧筆法に従えば、氏のごときは到と底終ていを全ぜんうすべき人ひとにあらず。漢かんの高祖こうそが丁公ていこうを戮りくし、清しんの康熙帝こうせいが明末めいの遺い臣しんを擯ひん斥せきし、日本ににては織田信長おだのぶながが武田勝頼たけだかつよりの奸臣かんしん、すな

わちその主人を織田に売らんとしたる 小山田義国おやまだよしくにの輩はいを誅ちゆうし、
 豊臣秀吉とよとみひでよしが織田信孝のぶたかの賊臣桑田彦右衛門くわたひこえもんの挙動きよどうを悦よろこばず、
 不忠不義者、世の見懲みごらしにせよとて、これを信考しんかうの墓前ぼぜんに磔はりつけにし
 たるがごとき、是等これらの事例じは実に枚挙まいきよに遑いとまあらず。
 騷擾そうじようの際ときに敵味方相対あいたいし、その敵の中に謀臣ぼうしんありて平
 和の説とを唱となえ、たとい弑心ふたごころを抱いだかざるも味方に利するところ
 あれば、その時にはこれを奇貨きかとして私ひそかにその人を厚遇こうぐうすれど
 も、干戈かんかすでに収まりおさりて戦勝の主領が社会の秩序ちつじよを重んじ、新
 政府の基礎きそを固くして百年の計をなすに当りては、一国の公道の
 ために私情を去り、曩さきに奇貨きかとし重んじたる彼かの敵国の人物を
 目もくして不臣不忠ふしんふちゆうと唱となえ、これを擯斥ひんせきして近づけざるのみか、

時としては殺戮することさえ少なからず。誠に無慙なる次第なれども、自から経世の一法として忍んでこれを断行することとなるべし。

すなわち東洋諸国専制流の慣手段にして、勝氏のごときも斯る専制治風の時代に在らば、或は同様の奇禍に罹りて新政府の諸臣を警しむるの具に供せられたることもあらんなれども、幸にして明治政府には専制の君主なく、政権は維新功臣の手に在りて、その主義とするところ、すべて文明国の輦に倣い、一切万事寛大を主として、この敵方の人物を擯斥せざるのみか、一時の奇貨も永日の正貨に変化し、旧幕府の旧風を脱して新政府の新貴顕と為り、愉快に世を渡りて、かつて怪しむ者なきこそ古来

未曾有の奇相なれ。

我輩はこの一段に至りて、勝氏の私の為めには甚だ気の毒なる次第なれども、聊か所望の筋なきを得ず。その次第は前にいえるごとく、氏の尽力を以て穩に旧政府を解き、由て以て殺人散財の禍を免かれたるその功は奇にして大なりといえども、一方より觀察を下すときは、敵味方相對して未だ兵を交えず、早く自から勝算なきを悟りて謹慎するがごとき、表面には官軍に向て云々の口実ありといえども、その内実は徳川政府がその幕下たる二、三の強藩に敵するの勇氣なく、勝敗をも試みずして降参したるものなれば、三河武士の精神に背くのみならず、我日本国民に固有する瘠我慢の大主義を破り、以て立国の根

本たる士氣しきを弛めたるの罪は遁のがるべからず。一時の兵禍へいかを免まぬかれしめたと、万世ばんせいの士氣を傷きずつけたると、その功罪相償あいつぐなうべきや。

天下後世に定論もあるべきなれば、氏の為ために謀はかれば、たとい今日の文明流に従つて維新いしん後に幸さいに身を全まつと、自みから省かえりみて我立わがりつこく、自みから省かえりみて我立わがりつこく、国の為ために至しだい大至しちよう重なる上流士人の氣風きかうを害がいしたるの罪を引き、維新前後の吾身わがみの挙動きよどうは一時の權道けんどうなり、權かりに和議わぎを講じて円滑えんかつに事を纏まとめたるは、ただその時の兵禍へいかを恐れて人民を塗炭とたんに救わんが為ためのみなれども、本来立りつこ国の要は瘖我慢やせがまんの一義あに在り、いわんや今後敵国外患がいかんの変へんなきを期きすべからざるにおいてをや。かかる大切たいせつの場合に臨のぞん

では兵禍へいかは恐るるに足らず、天下後世国を立てて外に交わらんとする者は、努なつ 《ゆめゆめ》吾維新わがいしんの挙動きよどうを学んで権道けんどうに就くべからず、俗にいう武士の風上かざかみにも置かれぬとはすなわち吾わが一身いつしんの事なり、後世子孫これを再演するなかれとの意を示して、断然だんぜん政府の寵遇ちようぐうを辞し、官爵かんしやくを棄て利禄りろくを抛ち、单たんし身去んさつてその跡を隠かくすこともあらんには、世間の人も始めてその誠まことの在あるところを知りてその清操せいそうに服ふくし、旧政府放解ほうかいの始末しまつも真まことに氏の功名こうめいに帰きすると同時に、一方には世教せいきよう万分の一を維持いじするに足るべし。

すなわち我輩わがはいの所望しようなれども、今その然しからずして恰あたかも国家こくがの功臣もつを以もつて傲然ごうぜん自みずから居おるがごとき、必ずしも窮屈きゆうくつなる

みかわぶし
三河武士の筆法を以て弾劾するを須たず、世界立国の常
情に訴えて愧るなきを得ず。啻に氏の私のために惜しむのみな
らず、士人社会風教の為に深く悲しむべきところのものな
り。

また勝氏と同時に榎本武揚なる人あり。これまた序ながら
一言せざるを得ず。この人は幕府の末年に勝氏と意見を異にし、
飽くまでも徳川の政府を維持せんとして力を尽し、政府の軍艦数
艘を率いて箱館に脱走し、西軍に抗して奮戦したれども、
ついに窮して降参したる者なり。この時に当り徳川政府は伏見
の一敗復た戦うの意なく、ひたすら哀を乞うのみにして人心既に
瓦解し、その勝算なきは固より明白なるところなれども、榎本氏

の拳こぶしは所謂いわゆる武士の意気地いきぢすなわち瘡我慢やせがまんにして、その方寸ほうすん
 の中には竊ひそかに必敗を期しながらも、武士道の為ために敢あえて一戦いっせんを試こころ
 みたることなれば、幕臣また諸藩士中の佐幕党さばくとうは氏うぢを総督そうとくと
 してこれに随ずい従じゆうし、すべてその命令に從したがって進退しんたいを共にし、
 北海の水戦、箱館の籠城ろうじよう、その決死苦戦の忠勇ちゆうゆうは天晴あつぱれ
 の振舞ふるまいにして、日本魂やまとだましの風教上より論じて、これを勝氏の
 始末しまつに比すれば年おなじを同おなじうして語るべからず。
 然しかるに脱走だつそうの兵、常に利あらずして勢漸いきおひやく迫せまり、また如何いかにと
 もすべからざるに至りて、総督そうとくを始め一部分の人々は最早もはやこれ
 までなりと覚悟かくごを改めて敵の軍門ぐんかどに降くだり、捕とらわれて東京とうきゆうに護送ごそうせ
 られたるこそ運つたなの拙つたなきものなれども、成敗せいはいは兵家へいかの常つねにして固もと

より咎むべきにあらざ、新政府においてもその罪を悪んでその人を悪まず、死一等を減じてこれを放免したるは文明の寛典といふべし。氏の挙動も政府の処分も共に天下の一美談にして間然すべからずといえども、氏が放免の後に更に青雲の志を起し、新政府の朝に立つの一段に至りては、我輩の感服すること能わざるところのものなり。

敵に降りてその敵に仕うるの事例は古来稀有にあらず。殊に政府の新陳変更するに当りて、前政府の士人等が自立の資を失い、糊口の爲めに新政府に職を奉ずるがときは、世界古今普通の談にして毫も怪しむに足らず、またその人を非難すべきにあらずといえども、榎本氏の一身はこれ普通の例を以て掩うべからざ

るの事故あるがごとし。すなわちその事故とは日本武士の人情こ
 ねなり。氏は新政府に出身して啻に口を糊するのみならず、累
 遷立身して特派公使に任ぜられ、またついに大臣にまで昇進
 し、青雲の志達し得て目出度しといえども、顧みて往事を回
 想するときには情に堪えざるものなきを得ず。

当時決死の士を糾合して北海の一隅に苦戦を戦い、北風
 競わずしてついに降参したるは是非なき次第なれども、脱走
 の諸士は最初より氏を首領としてこれを持ち、氏の為めに苦
 戦し氏の為めに戦死したるに、首領にして降参とあれば、たと
 い同意の者あるも、不同意の者は恰も見捨てられたる姿にして、
 その落胆失望はいうまでもなく、ましてすでに戦死したる者

においてをや。死者若し靈あらば必ず地下に大不平を鳴らすこと
 ならん。伝え聞く、箱館はこだての五稜郭ごりようかく開城かいじょうのとき、総督そうとく榎
 本氏より部下に内意を伝えて共に降参せんことを勧告かんこくせしに、
 一部分の人はこれを聞いて大に怒り、元来今回の挙きよは戦勝を期した
 るにあらず、ただ武門の習ならいとして一死もつ以て二百五十年の恩むくいに報
 のみ、総督もし生を欲せば出でて降参せよ、我等は我等の武士道
 に斃たおれんのみとて憤戦ふんせん止まらず、その中には父子諸もろとも共に切きりじ
 死にしたる人もありしという。

烏江うこう水みず浅あさく、騅能逝すいよくゆく、一片義心いつぺんぎしん不可ひんがしすべからず、東とうとは、往古おうこ

漢楚かんその戦に、楚軍そくん振ふるわらず項羽こううが走りて烏江うこうの畔ほとりに至りしとき、或とど

人はなお江を渡りて、再さい挙きよの望のぞなきにあらずとてその死を留とどめ

たりしかども、羽はこれを聴かず、初め江東の子弟八千を率いて西し、幾回の苦戦に戦没して今は一人の残る者なし、斯る失敗の後に至り、何の面目か復た江東に還りて死者の父兄を見んとて、自尽したるその時の心情を詩句に写したるものなり。

漢楚軍談のむかしと明治の今日とは世態固より同じからず。

三千年前の項羽を以て今日の榎本氏を責るはほとんど無稽なるに似たれども、万古不変は人生の心情にして、氏が維新の朝に青雲の志を遂げて富貴得々たりといえども、時に顧みて箱館の旧を思い、当時随行部下の諸士が戦没し負傷したる惨状より、爾来家に残りし父母兄弟が死者の死を悲しむと共に、自身の方向に迷うて路傍に彷徨するの事実を想像し聞見するときは、

男子の鉄腸てつちようもこれが為めに寸断すんだんせざるを得ず。夜雨秋寒やうあきむうして眠就ねむららず残燈ざんとう明滅めいめつ独り思うの時には、或は死靈しりよう生いきり霊う無数の暗鬼あんきを出現して眼中に分明なることもあるべし。

蓋けだし氏の本心は、今日に至るまでもこの種の脱走士人だつそうしじんを見捨

てたるに非ず、その挙を美としてその死を憐あわれまざるに非ず。今一

証を示さんに、駿州すんしゆう清見寺内せいけんじないに石碑せきひあり、この碑は、前年

幕府の軍艦咸臨丸かんりんまるが、清水港しみずみなとに撃たれたるときに戦没せんぼつした

る春山弁造はるやまべんぞう以下脱走士の為めに建てたるものにして、碑の背

面に食人之食者ひとのしよくを はむものは死人之事ひとのことにしすの九字を大書して榎本えのもとたけ

武揚あきと記し、公衆の觀に任して憚はばかるところなきを見れば、その

心事の大概たいがいは窺知うかがひるに足るべし。すなわち氏はかつて徳川家の

食しよくを食む者にして、不幸にして自分は徳川の事に死するの機会を失うたれども、他人のこれに死するものあるを見れば慄こうが慨いちゆう惆ゆう悵ちよ自おのから禁ずる能あたわず、欽慕きんぼの余あまり遂ついに右の文字をも石いしに刻こくしたることならん。

すでに他人の忠ちゆう勇ゆうを嘉よみするときは、同時に自みずから省かえりみて聊いささか不愉快ふゆかいを感じずるもまた人生の至情しじように免まぬかるべからざるところなれば、その心事を推察すいさつするに、時としては目下の富貴ふうきに安んじて安楽あんらく豪奢ごうしゃ余念よねんなき折柄おりから、また時としては旧時の惨さんじ状ようを懐おもうて慙愧ざんきの念を催もよおし、一喜一憂一哀一楽、来往らいおう通常つねならずして身を終るまで円満えんまんの安心あんしん快樂かいらくはあるべからざることならん。されば我輩わがはいを以もつて氏の為ために謀はかるに、人の食しよくを食む

の故を以て必ずしもその人の事に死すべしと勸告するにはあらざれども、人情の一点より他に対して常に遠慮するところなきを得ず。

古来の習慣に従えば、凡そこの種の人は遁世出家して死者の菩提を弔うの例もあれども、今の世間の風潮にて出家落飾も不似合とならば、ただその身を社会の暗処に隠してその生活を質素にし、一切万事控目にして世間の耳目に触れざるの覚悟こそ本意なれ。

これを要するに維新の際、脱走の一挙に失敗したるは、氏が政治上の死にして、たといその肉体の身は死せざるも最早政治上に再生すべからざるものと観念して唯一身を慎み、一は以

て同行戦死者の霊を弔してまたその遺族の人々の不幸不平を慰め、
 また一には凡そ何事に限らず大挙してその首領の地位に在る者
 は、成敗共に責に任じて決して決してこれを遁るべからず、成ればそ
 の榮譽を専らにし敗すればその苦難に当るとの主義を明にするは、
 士流社会の風教上に大切なることなるべし。すなわちこ
 れ我輩が榎本氏の出処に就き所望の一点にして、独り氏
 の一身の為めのみならず、国家百年の謀において士風消長
 の為めに軽々看過すべからざるところのものなり。
 以上の立言は我輩が勝、榎本の二氏に向て攻撃を試みたる
 にあらず。謹んで筆鋒を寛にして苛酷の文字を用いず、以てそ
 の人の名誉を保護するのみか、実際においてもその智謀忠勇

の功こう名みやうをば飽あくまでも認みとむ者ものなれども、凡およそ人生にんじやうの行路ぎやうろに富ふ貴うきを取れば功名を失い、功名を全まうせんとするときは富貴を棄すてざるべからざるの場合あり。二氏のごときは正ましくこの局まきに当る者にして、勝氏が和議わぎを主張して幕府を解ときたるは誠まことに手際てぎわよき智謀ちぼうの功名なれども、これを解ときて主家の廃滅はいめつしたるその廃滅の因縁いんねんが、偶たままた以もつて一旧臣たの爲ために富貴を得せしむるの方便ほうべんとなりたる姿すがたにては、たといその富貴ふうきは自みから求めずして天外てんがいより授さずけられたるにもせよ、三河武士みかわぶしの末流まつりゅうたる徳川一類とくがわんいちるいの身みとして考かうれば、折角せつかくの功名手柄てがらも世間の見るところにて光を失わざるを得ず。

榎本氏が主戦論をとりて脱走だつそうし、遂ついにに力尽つきて降くだりたるまで

は、幕臣の本分に背かず、忠勇の功名美なりといえども、降
 うさんほうめんのち
 参放免の後に更に青雲の志を発して新政府の朝に富貴を求め
 ちようふうき
 得たるは、曩にその忠勇を共にしたる戦死者負傷者より爾来の
 さき
 流浪者貧窮者に至るまで、すべて同挙同行の人々に対
 どうきよどうこう
 して聊か慙愧の情なきを得ず。これまたその功名の価を損ずると
 いさざざんき
 ころのものにして、要するに二氏の富貴こそその身の功名を空う
 むなし
 するの媒介なれば、今なお晩からず、二氏共に断然世を遁れ
 ばいかい
 て維新以来の非を改め、以て既得の功名を全うせんことを祈るの
 いしん
 み。天下後世にその名を芳にするも臭にするも、心事の決断如何
 ほう
 に在り、力めざるべからざるなり。
 あつと
 しか
 然りといえども人心の微弱、或は我輩の言に従うこと能わ
 びじやく
 わがはい
 げん
 あた

ざるの事情もあるべし。これまた止むを得ざる次第なれども、兎とに角かくに明治年間にこの文字を記して二氏を論評したる者ありといえ、また以て後世士人の風を維持いじすることもあらんか、拙筆せつぴつまた徒勞とらうにあらざるなり。

青空文庫情報

底本：「明治十年丁丑公論・瘠我慢の説」講談社学術文庫、講談社

1985（昭和60）年3月10日第1刷発行

1998（平成10）年2月20日第10刷発行

底本の親本：「明治十年丁丑公論・瘠我慢の説」時事新報社

1901（明治34）年5月2日発行

初出：「時事新報」

1901（明治34）年1月1日発行

※誤り箇所は底本の親本にて確認しました。

※旧字の「竊・燈」は、底本のママとしました。

入力：kazuishi

校正：田中哲郎

2006年11月7日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waazora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

瘠我慢の説

瘠我慢の説

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 福沢諭吉

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>